

何十年も昔、親友と南スペインを旅するのをり、窃盜に遭遇せり。今はすでに存在せぬイベリア航空にてマドリードよりスペインへ入國。プラド博物館など觀光スポット巡りし後、トレドをもバスにて訪れたり。トレドは外部より車進入不可のため高き城壁の中は、走る車とて殆ど無く、古き佳き日の趣きあり。エルグレコの生家訪れ、繪畫等觀て廻るに、グレコの宗教畫數多ありて、その帶ぶる狂氣年經る毎に強く我を震撼せしむ。さらに、汽車とバスを乗り繼ぎてアンダルシアへ至る。グラナダにおいては修道院の運營するホテルに宿泊を希望したれども、一年以上前に豫約するにあらざれば不可なりと聞き、已むなく城壁の中の古きホテルに宿泊せり。アルハンブラの宮殿を終日觀光し、疲れ果てたる身に、ポルターガイストと遭遇す。まづ水道の蛇口勝手に全開となり水ジャージャー流れ、その後洋服ダンス倒れんばかりにガタガタと動き、中よりネズミ何匹も飛び出づるにあらざやと思ふほどの音鳴り響き、とどめはベッドなき窓の方より寢息聞え、また聞え來たるといふ身の毛もよだつばかりなりき。

翌日はアルハンブラを後にし、バスにてコルドバへ向ふ。モスクの上にカテドラル建ちたる「教會」には感銘受けたり。街全體迷路のごとく細き小路通りありて、いたるところに鉢植ゑの花あり、綺麗なる街なりき。親切なる初老のおやぢさんはいはく、「日暮れなば外出すべからず」とのことに、かくのごとき閑靜なる町にてかかる危険のあるらんかと驚きたり。

翌日セビリアに到着。夕方ホテルにチェックインし、食事をせんと歩み寄りしとき、前よりジプシー風の青年現れ、ハンドバッグひつたくらむとす。抵抗するも右肩脱臼、身動き取れず。親友必死にそのひつたくり乗りたるバイクを追ふもすぐに見失ひて戻りけるも當然とは言へ口惜し。パトカー到着し、警察に連行せられて、質問を浴びせられたり。英語に片言のスペイン語を混へて應答せり。ホテルより東京に電話入れ、クレジット・カード停止せしめたり。イベリア航空に電話し、航空券再發行せしめ、更には朝日新聞のロンドン駐在特派員および東京本社 の經濟部長に電話入れ、パスポートの即日再發行に就き、外務省本省よりもマドリードの大使館あてに御指示給はるべく依頼せり。翌日マドリードへ戻り、大使館に向き、パスポートの申請したれば、即日發行の運びと相成り、豫定通りの便にて東京へ歸著せり。この親友朝日に勤めてあり、東京本社へ戻るに、すでに多方面より情報入り、赤谷パスポート等窃盜犯にとられしかば、歸國遅るるかといふ話になれど、彼女のことなれば多分豫定通りに歸國すべし、とこもごも噂あり。かくも強氣にして強引なる女と思はるるかと思はるるかと思ひありき。